小児に発生した耳下腺腺房細胞癌の一例

◎仲 秀規[1)]、松永崇志[1)]、駄阿 勉[2)]
独立行政法人 地域医療機能推進機構 南海医療センター[1)]、大分大学附属病院病理診断科・病理部[2)]

【はじめに】今回、小児に発生した耳下腺腺房細胞癌の1例を経験したので細胞像、組織像を中心に報告する。

【症例】10歳代、女性。左耳下腺の腫脹自覚し近医耳鼻科受診。左耳下腺部に腫瘤触知し、圧痛は認められなかった。超音波画像で左耳下腺内に腫瘤認めたため、精査目的に当院耳鼻科に紹介受診となった。

【画像所見】超音波画像：左耳下腺内に境界明瞭、内部充実性腫瘤あり。CT画像、MRI画像：左耳下腺深部に類円形腫瘤を認めた。造影パターンから腺房細胞癌、ワルチン腫瘍を疑う所見であった（年齢を考慮し腺房細胞癌＞ワルチン腫瘍）。

【細胞所見】少数の炎症細胞を背景に、腺房細胞集団と導管上皮か腺房細胞か由来の分かりにくい細胞集団が認められた。細胞集団内には血管間質がみられ、裸核細胞も認められた。特徴的所見に乏しく組織型推定は困難。悪性を疑うような核異型や細胞異型ははっきりとしないが、腺房細胞癌を完全には否定できない細胞像であった。

【病理組織所見】耳下腺内に線維性被膜で被包された結節状腫瘍が認められた。内部では、好塩基性の細胞質と濃染した核を有する腺房細胞に類似した細胞が主体の密な増殖が認められ、淡好酸性細胞質を有する細胞も混在していた。腺房細胞癌の組織像であった。切除断端に腫瘍の露出は認められなかった。

【結語】唾液腺腺房細胞癌は唾液腺悪性腫瘍の1～6%を占め、主に耳下腺、次いで小唾液腺に好発する低悪性度の腫瘍である。小児に発生することも稀にある。経過が長く、局所再発もしばしば遅発性に認められる。低悪性度の腫瘍の場合、特徴的な所見に乏しいなど細胞所見で判定困難なことも多々ある。唾液腺の細胞診は多彩な像の一部分を採取してきた可能性もあるため、臨床所見（部位、年齢、経過など）をふまえたうえで、細胞診断を行う必要がある。今回の症例は特に年齢を考慮することが重要であった。

連絡先：0972-22-0547（代表）